

1.4 ヨーロッパ言語ポートフォリオ (European Language Portfolio: ELP)

ヨーロッパ言語ポートフォリオ¹ (European Language Portfolio: 以下「ELP」) は、欧州評議会によって考案され、ヨーロッパ各地で、言語学習、異文化学習のために使用されている。ELP は、一つのものがあるというわけではなく、学習者、学習環境、学習目的などに応じて、さまざまな ELP が開発されている。本書巻末資料 3 の ELP 認定リストからも分かるように、現在までに約 70 の ELP が開発され、欧州評議会の認定を受けている。ELP は、欧州評議会の言語教育政策を推進するために考案されており、言語学習を促し、欧州評議会加盟国間の移動を促進することが目的とされている。そして、ヨーロッパ言語共通参照枠組み (Common European Framework of Reference for Languages: 以下「CEF」) の目的を実行する教育的ツールであり、CEF の共通参照レベル (Common Reference Level: 以下 CEF 参照レベル) の詳細な記述を、実際に学習の場にも用いることができるものである (1.3.2 参照)。

欧州評議会の定義によると、ELP は学習者が、取得した資格をはじめ、重要な言語的、異文化的経験を、国を越えて明瞭な形式で記録でき、そして生涯にわたり使用できる言語学習に関する個人の記録である。構成は、言語能力が確認できる言語パスポート (language passport)、学習目標を設定し、自己評価により学習進行状況を把握し、記録できる言語学習記録 (language biography)、学習成果が保管できる資料集 (dossier) の 3 部から成る。ELP を用いることにより、学習者は積極的な言語学習が可能となる。そして、ELP は、ヨーロッパ共通の能力レベル記述である CEF 参照レベルが基盤となっているので、その所有者は、どこの国で、どの言語を学習するとしても、自己の言語能力を明確に提示することができる。

本稿では、ELP がどのようなものであるかということ、その考案および開発にいたる背景、目標、目的、機能、構成、使用、認定、現状等にわたり説明していく。

1.4.1 ELP 考案、開発にいたる背景とその目標

1.4.1.1 ELP 考案、開発にいたる背景

ELP 考案、開発のきっかけとなったのは、1991 年にスイスのルシュリコンで行われたシンポジウムであった (1.1.3 参照)。そのシンポジウムで、CEF の開発促進とともに、ELP の形式および機能を考案する委員会を設立するという提案がなされた。シンポジウムの報告書には、CEF を基盤とした上で、「ELP には、ヨーロッパ共通基準に対応する資格を記入するセクション、学習者が明確に自己の言語学習経験を記録できるセクション、そして学習成果のサンプルを入れるセクションを含むべきである」(Little 2002, p.182) と言及されている。これが、現在の 3 部構成からなる ELP の原案となり、また ELP と CEF の明確な関係の基になったものであると言える。

1990 年代半ばに、最初の ELP がスイス、ドイツ、フランスで開発され、1997 年には、欧州評議会により ELP 開発における提案が正式に発表された。そして、1998 年から 2000 年の 2 年半にわたり ELP パイロットプロジェクトが実行され、欧州評議会加盟国のうち 15 か

¹『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』では、訳語として「ヨーロッパ言語学習記録帳」が使用されているが、本稿では「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」と訳す。

国²および三つの組織³が参加し、ELP の開発、試行的導入が行われた。

欧州言語年 2001 には、ヨーロッパ各地で ELP 導入が試みられ、あらゆる環境で ELP が開発、使用できるように、さまざまな研究が行われ、その指針も出来上がっていった。現在は、試行的実施も終わりの段階に入り、ELP 普及の規模も大きくなっている。

1.4.1.2 ELP の目標

ELP は、欧州評議会の言語教育政策に反映したものでなければならず、また CEF との関連も非常に重要なものと捉えられている。以下が『ELP の原則および指針 (European Language Portfolio: principles and guidelines)』(2000&2004) で規定されている ELP の目標である。

- ・ヨーロッパ市民の相互理解を深める
- ・多種多様な文化、生活を重んじる
- ・言語的、文化的多様性を保護すると同時に促進する
- ・生涯にわたり複言語主義を身につける
- ・言語学習者を育成する
- ・自立学習 (independent language learning) ができる能力を開発する
- ・言語学習プログラムに透明性および一貫性を持たせる
- ・移動を容易にするために、言語能力および資格を明瞭に記述する

(Council for Cultural Cooperation 2000a, p.2 & Language Policy Division 2004, pp.2-3 より筆者訳)

この中の複言語主義は、CEF の基盤となる言語観であり、また言語学習プログラムの透明性および一貫性は CEF の重要な原則でもある (1.3.2 参照)。このことから分かるように、ELP と CEF は、密接に関連している。それは、CEF の目標がヨーロッパにおける言語教育の向上を図るための共通基準を与えることであるのに対し、ELP はその共通基準を用い、欧州評議会が目指す複言語主義、複文化主義 (pluriculturalism) の促進を実現していく教育的ツールであるからである。複言語主義、複文化主義を推進していくためには、個人の言語学習、異文化経験の記録ができ、そして、その記録が正式に認められる必要がある。その記録を可能にし、自己の言語能力を CEF 参照レベルに基づき提示できるものが ELP である。

1.4.2 ELP の目的、機能、構成、使用

1.4.2.1 ELP の目的

ELP は、欧州評議会の多くの加盟国により、積極的な導入が図られているが、それは以下の二つが主な目的とされている。

² オーストリア、チェコ、フィンランド、フランス、ドイツ、ハンガリー、アイルランド、イタリア、オランダ、ポルトガル、ロシア、スロベニア、スウェーデン、スイス、英国の 15 か国。

³ EAQUALS (European Association for Quality Language Services)、CercleS (Confédération Européenne des Centres de Langues de l'Éducation Supérieure /European Confederation of Language Centres in Higher Education)、European Language Council の三つ。

- ・学習者が、学習段階のどのレベルにおいても、自己の言語的技能を多角的に伸ばしていることを認識し、学習動機が高められるようにする
- ・学習者が習得した言語的技能、文化的技能の記録ができるものを提供する

(Schneider & Lenz 2001, p.3 より筆者訳)

1.4.2.2 ELP の機能

後述する ELP の 3 部構成は、教育的機能 (pedagogical function) と報告的機能 (reporting function) が基盤となっている。この二つの機能が担う役割は、以下のようにまとめられる。

報告的機能

- ・公的試験で与えられる言語に関する資格を補足するものとして、ELP 所有者の具体的な言語学習経験、外国語の熟達度、到達度を示す
- ・学校教育内、学外両方の言語学習を記録する

教育的機能

- ・複言語主義、複文化主義を促進する
- ・言語学習過程を ELP 所有者に、より分かりやすく示し、自律学習 (learner autonomy) を育成する

1.4.2.3 ELP の構成

学習者は、異なる環境において、さまざまな目的で言語を学習しており、またその年齢も異なる。それゆえ、ある特定の学習者グループそれぞれに適した ELP が、ヨーロッパ各地で開発されている。欧州評議会が認定する ELP は、上記の二つの機能を担うものでなければならず、そして、言語パスポート、言語学習記録、資料集の三つから構成されることが原則とされている。実物は、インターネットで参照、またダウンロード可能な ELP もある (本書巻末資料 3 参照)。以下に 3 部構成の内容を説明していく。

1.4.2.4 言語パスポート Language Passport

言語パスポートは、ELP 所有者の言語に関する資格、CEF 参照レベルを基盤とした自己評価表 (self-assessment grid) にしたがつた言語技能の熟達度、そして言語学習経験、異文化経験等を簡潔に記入するページである。ELP 所有者の言語に関する能力が確認できるよう、学習しているもしくは学習した言語の自己評価を、CEF 参照レベル (A1 ~ C2 の 6 レベル) に基づき、技能別に記入できるようになっている。技能は、聞くこと (listening)、読むこと (reading)、やり取り (spoken interaction)、表現 (spoken production)、書くこと (writing) の五つのコミュニケーション技能に分かれており、学習言語の技能別レベルを、言語パスポートに記入することができる。また、自己評価だけでなく、教師による評価、言語関係の学位、資格のような教育関係当局による評価も入れることができる。そして、言語学習経験、異文化体験に関しては、学校教育における言語学習経験、それ以外の経験、職場における言語使用、その言語の母語話者との接触等も記入できるようになっている。

この言語パスポートは、ELP 所有者が持っているすべての言語能力を、誰がどこで見ても簡単に確認できる、その名の通り、言語能力を証明するパスポート的な役割を担っている。15 歳以上の学習者に対して使用することが奨励されている成人向け標準パスポート (Stand-

ard Adult Passport) があり、それは欧州評議会 ELP ウェブサイトよりダウンロード可能である。

1.4.2.5 言語学習記録 Language Biography

言語学習記録は、ELP 所有者が学習目標を設定し、自己の学習過程を観察し、重要な言語学習、異文化経験を記入していくページである。言語パスポートとの違いは、言語パスポートが ELP 所有者の言語技能の熟達度、言語学習、異文化経験を簡潔にまとめるものであるのに対し、言語学習記録は、学習者が学習計画を立て、それを実行していく上で、自己の学習過程、学習進度を観察し、自己評価を行っていく助けとなる言語学習ダイアリーのようなものであるということである。

内省学習に重きを置いたこの言語学習記録は、教育的観点から見た場合、ELP の中心的な役割を担っていると言える。また、個人差はあっても、言語パスポートは言語コース開始時および終了時に記入を行えばよいが、言語学習記録は学習期間中に毎週、毎月といったペースで記入していくものである。言い換えれば、言語パスポートはある時点までの言語技能の熟達度、言語および異文化学習の記録を示す総括的評価 (summative assessment) であるのに対し、言語学習記録は現在進行中の言語技能の熟達度、言語および異文化学習の記録を示す形成的評価 (formative assessment) であると言える。

言語学習記録は、内省学習を促進することが使用目的の一つであり、学習者が目標言語の各技能において、何ができるのかという自己評価を行う。その自己評価は、CEF 参照レベルの自己評価表に対応したチェックリストを使って行う。チェックリストは、自己評価表にある各レベルに対し、技能別に、達成すべき目標が能力記述文 (descriptor) で詳細に書かれている。その記述は、CEF 参照レベルに反映しているため、「～ができる」という例示的能力記述文 (illustrative descriptor) となっている。欧州評議会 ELP ウェブサイトからダウンロード可能なチェックリストに、スイスで開発されたもの (英語・フランス語) があり、その英語版のレベル A1 を翻訳したものが本稿の資料 1 である。

チェックリストは、各レベルの各技能に、いくつかの項目が用意されているので、学習者は、明確に自己の言語学習を省みることができる。そして、今の自分に必要なことは何かを考え、次の目標を立てていくことができる。自己の言語学習を計画、観察、評価することは、自律学習を育成、促進する上で非常に重要なことである。また、言語学習記録では、学習者が学校教育内、学外の両方で得た言語的、異文化的知識を記入するページもある。これは、いくつかの言語および文化能力を伸ばしていくといった複言語主義および複文化主義を促進することが目的であると言える。

1.4.2.6 資料集 Dossier

資料集には、ELP 所有者である学習者が、学習言語の熟達度を示すのに重要だと思うものを、自己の判断により入れていく。ここでは、言語パスポート、言語学習記録に記入してある言語学習、文化学習において達成したこと、経験したことの記録を保管しておくことができる。具体的には、学習内容をまとめたもの、プロジェクトワーク、言語に関する資格の証明書、教師からのフィードバック等を保管しておくものだと言えよう。年少の学習者にとっては、教科書を補足するために目標言語の教材をまとめたスクラップブックのようなものとなりうる。また、もう少し年齢が高い学習者にとっては、公的試験で問われる技能と関連したプロジェクトワークの結果などを入れるものになりうる。そして、成人の学習者にとっ

ては、目標言語を使用し、実際の生活で達成できる能力を証明できるもの、例えば、手紙のサンプル、メモ、レポートのようなものを保管しておける。また、書く能力だけでなく、話す能力も示したい場合は、カセットテープ、ビデオテープを資料集に入れることもできる。

1.4.2.7 ELP の使用

ELP をどのように使っていくかということは、立場によって異なってくるが、使用者は大きく分けて、学習者、教育機関および教師、そして雇用主に分けることができる。

学習者は、学習の場が正規教育の枠内であろうとなかろうと、言語学習を記録することができる。言語学習記録をしていくということは、学習の計画を立て、その学習過程を観察し、学習したことを自己評価していく能力を開発することにつながる。それは、自己の言語的技術および重要な異文化経験の記録を示す証拠にもなり、また学習で達成したことをファイルしていくこともできる。学習者にとっては、総括的な言語学習の記録となる。そして、転校する、進学する、言語コースが始まる、キャリアアドバイザーと会う、就職活動をするといった機会に、自己の言語能力を示すために ELP を提示することができる。

教育機関および教師にとっては、欧州評議会が制定する CEF 参照レベルと照らし合わせ、その教育機関のコースおよび資格等をより明確なものにできる。また、新入生や転校生、留学生を受け入れる際、その学習者が学習言語を使用し、何ができるかということが分かるので、教育機関、教師にとってもレベル等の対応が容易になる。

雇用主にとっては、言語能力が社員採用に関わる場合は、ELP に記録されている情報からその候補者の言語的技術を判断することができる。また、ある仕事に要求される言語的技術を特定することも可能である。

1.4.3 ELP の認定

2000 年 10 月に行われた欧州評議会教育大臣会議で、大規模な ELP 導入を奨励していくことが決議された。これと同時に、文化協力審議会により、ELP の認定委員会（Validation Committee）が設立された。認定委員会は、1 年に 2 回会議を行い、提出された ELP の審査を行っている。

1.4.3.1 ELP の認定条件

欧州評議会の認定を受けるには、その ELP の質、妥当性、透明性が判断される。審査は、欧州評議会が定める『ELP の原則および指針』を基に行われる。どの ELP も欧州評議会の言語教育政策に反映したものを開発することが大前提となる。認定 ELP には、以下のことが求められる。

- ・ ELP は、複言語主義および複文化主義を促進するツールである
- ・ ELP は、その学習者の所有物である
- ・ ELP は、正規の学校教育かどうかに関わらず、学習者が習得した言語的および文化的能力、経験を評価する
- ・ ELP は、自律学習を促進するツールである
- ・ ELP は、学習者が言語学習過程を観察する助けとなる教育的機能、言語熟達度を記録する報告的機能、両方を兼ねそろえたものである
- ・ ELP は、CEF 参照レベルを基盤とする

- ・ ELP は、学習者の自己評価（通常教師の評価と併用）と教育関係当局および試験機関による評価を奨励する
- ・ ELP は、ヨーロッパで認識および理解されるための最低限の必要な要素を備えている
- ・ ELP は、ある一連の ELP を学習者が生涯を通し所有できる。また、学習者の年齢、目的、環境に応じ、そのニーズを満たせるものを提供する

(Council for Cultural Cooperation 2000a, p.2 & Language Policy Division 2004, pp.3-4 より筆者訳)

開発者は、以上のことを踏まえ、ELP を言語パスポート、言語学習記録、資料集の 3 部構成で作成することが条件とされる。

1.4.4 ELP パイロットプロジェクトの結果およびこれからの課題

1.4.4.1 ELP パイロットプロジェクトの結果

『ELP パイロットプロジェクト最終報告書 (European Language Portfolio: final project on the piloted project)』(2000) が正式に発表され、全体的に非常にいい結果が出ている。パイロットプロジェクトでは、欧州評議会加盟国のうち 15 か国および三つの非政府組織が参加し、ELP の実用性、可能性、効果が検証された。初等教育、中等教育、高等教育、成人教育、職業訓練にわたるすべての教育関係当局において ELP 導入が試みられ、プロジェクトに参加した総学習者数は、およそ 3 万人、教師数は 1,800 人と報告されている (Schärer 2000, p.7)。

ELP 導入の目的は、そのプロジェクトにより異なり、初等教育低学年における外国語導入、移民が学校教育を受ける必要性から、言語学習における学校全体のカリキュラム開発等、さまざまであった。また、規模も大きいものから小さいものまで、種々であったが、全体的に結果はよく、ELP は教育的ツールとして言語学習に効果的で、また欧州評議会の言語教育政策を促進するものであると報告されている。プロジェクトに参加した 68% の学習者が、「ELP 記入に費やした時間は有意義であった」と答えている。また、70% の教師が、「ELP は学習者にとって有益なツールである」、そして、78% の教師が「ELP は教師にとって有益なツールである」とフィードバックを残している (ibid., p.10)。

ELP において中心的な役割を担う自己評価に関しても、多くの学習者が CEF 参照レベルを基盤とする ELP は、自己の言語能力を評価する動機を与えると報告している。70% の学習者が、「ELP は自己の能力を評価する動機を与える」、「自己評価と教師の評価を比べることが役に立つ」、また 62% の教師が「学習者は自己の言語能力を評価することができる」と答えている (ibid.)。

ELP における自己評価は、自己の能力を理解し、学習動機を高める教育的ツールであると言えるが、この評価法は学習者、教師の両者にとって新しい方法であるということもあり、いくつかの課題が残されている。自己評価において、学習者が自己の能力を過大評価してしまったり、反対に過小評価してしまったりする傾向があるといった問題が指摘されている。また、教師と学習者の評価に差が出てくるとも問題の一つで、それは統計結果にも表れている。65% の教師が学習者の自己評価に同意したと答えているのに対し、教師が自分自身の評価に同意したと答えている学習者は、53% であった (ibid.)。この結果からも分かるように、自己評価の方法論にはさらなる見直しが必要であると言える。

また、ELP の報告的機能に関しては、学習者、教師の両者が、ELP の位置づけを明確にしてほしいと報告している。ELP の自己評価が最終評価においてどのように使用されるのか、ELP が従来の試験とどう関連してくるのか、ELP の自己評価が就職等の際、雇用主によって正式に認められるのかなどの疑問点が挙げられている。

1.4.4.2 これからの課題

1998 年から 2000 年の試行段階を終え、現在は、さらに大きな規模で ELP 導入が試みられている。しかし、これは容易なことではなく、問題点もある。ELP 導入に積極的かどうかということは、国によって異なり、教育関係当局が ELP 導入に非常に力を注いでいる国もあれば、そうでない国もある。ELP は、学校教育の内外を問わず、すべての言語学習を評価し、年齢、熟達度を問わず、さまざまな学習者に使用されることが望ましいと、欧州評議会は考えている。しかし、これが長期的に実現可能かどうかということは、いかに教育制度の中で ELP が取り入れられ、定着していくかということにかかっていると言える。

ELP の構成に関しては、パイロットプロジェクトでも言語パスポート、言語学習記録、資料集の 3 部構成は、有効なものであると実証されているが、これからのさらなる開発にあたり考慮されるべき点も挙げられている。一つは、就職活動等に ELP を提示する際、人選をする雇用主側にとって、ELP は情報が多すぎるという点である。雇用主側に ELP を詳細にわたり見る時間があればいいのだが、現実にはある程度まとまった情報の方が好まれる。それゆえ、就職活動の助けとなる履歴書のような役割を果たす、1 ページにまとめた成人向け標準パスポートを開発するのも一つの手段ではないかという提案がされている。また、ELP を開発する際、言語パスポート、言語学習記録、資料集の 3 部構成にすることは原則であるが、その内容に関しては開発者側の意図に任されている。特に、言語学習記録、資料集に関しては、どこまで開発者側に自由を与えるかということも考えていかなければならない課題とされている。

ELP の中心的役割を果たす自己評価に関しても、いくつかの課題が残されている。学習者が学習計画を立て、学習過程を観察して行く上で、言語学習記録における自己評価は非常に重要なものである。そして、自己評価を行う言語学習記録のチェックリストにある能力記述文は、CEF 参照レベルと並行していなければならないのだが、ELP によっては、わかりにくいものもあることが指摘されている。これに関しては、『ELP における自己評価の能力記述文バンク (A bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolio)』(2004) が発行され、開発者にとって、能力記述文開発にあたる指針となっている。既に認定されている ELP の能力記述文が CEF の能力記述文と並行してリストされている。例えば、口頭でのやり取りという技能に関して、A2 レベルではどのような記述文があるかを見ることができる。また、これにともない『ELP 開発者ガイド (Guide for Developer of European Language Portfolio)』(2001) の能力記述文開発に関連する第 6 章 (Introduction to the bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolio (2004)) も改訂され、その使用法も示唆されている。

自己評価の方法に関しても、さらなる開発が望まれている。学習者が自律的に正確な自己評価をする能力を身に付けるためには、学習者、教師両者のトレーニングが必要であり、それも現在進行中であるプロジェクトに残されている課題の一つである。

ヨーロッパ各地でプロジェクトは続けられており、欧州評議会主導のセミナーも定期的に行われ、各国の代表者および専門家が集まり、ELP を推進していく上でのさまざまな課題

が検討されている。教育的機能だけではなく、学習者が言語熟達度を提示できる報告的機能としての有効性が活かされるには、ELP のさらなる普及が重要だと言われている。地域、機関といったレベルだけではなく、ELP が言語教育政策として正式に取り入れられ、国（州、共同体）で奨励されていく必要性が示唆されており、その理想的な例として、ドイツのテューリンゲン州における ELP 導入が挙げられている（2.3.6 参照）。大きな規模での ELP 普及により、多くの教師、学習者に ELP が活用され、そして、それが ELP の改良、浸透につながっていくことが望まれている。

参考文献

- Council of Europe (2004) *European Language Portfolio: Council of Europe seminar sponsored by the Ministry of National Education, Turkey, the Turkish National Education Foundation and the Association of Turkish Private Schools* (Reported by D. Little). Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2004) 3). (<http://culture2.coe.int/portfolio>)
- Council for Cultural Cooperation (2000a) *European Language Portfolio (ELP) : principles and guidelines*. Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2000) 33).
- Council for Cultural Cooperation (2000b) *European Language Portfolio (ELP) : rules for the accreditation of ELP models*. Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2000) 26 rev. 2). (<http://culture2.coe.int/portfolio>)
- Council for Cultural Cooperation (2002) *European Language Portfolio (ELP) : guidelines for the submission of ELP models for validation*. Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2002) 12). (<http://culture2.coe.int/portfolio>)
- Council of Europe (2001) *Common European framework of References for Languages: learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. (<http://culture2.coe.int/portfolio>)
- Language Policy Division (2004) *European Language Portfolio (ELP) : principles and guidelines with added explanatory notes (Version 1.0)*. Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2000) 33rev.1 Revised in June 2004). (<http://culture2.coe.int/portfolio/>)
- Lentz, P. & Schneider, G. (2004) *A bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolio*. Strasbourg: Council of Europe. (<http://culture2.coe.int/portfolio/>)
- Lentz, P. & Schneider, G. (2004) *Introduction to the bank of descriptors for self-assessment in European Language Portfolio*. Strasbourg: Council of Europe. (<http://culture2.coe.int/portfolio/>)
- Little, D. (2002) The European Language Portfolio: structure, origins, implementation and challenges. *Language Teaching* 35 (3) : 182-189.
- Little, D. & Perclová, R. (2001) *European Language Portfolio: guide for teachers and teacher trainers*. Strasbourg: Council of Europe. (<http://culture2.coe.int/portfolio>)
- Little, D., Ridley, J. & Ushioda, E. (2002) *Toward Greater Learner Autonomy in the Foreign Language Classroom*. Dublin: Authentik.
- Little, D. & Simpson, B. (2003) *European Language Portfolio: The intercultural component*

and learning how to learn. Strasbourg: Council of Europe (DGIV/EDU/LANG (2003) 4). (<http://culture2.coe.int/portfolio>)

Schärer, R. (2000) *European Language Portfolio: final report on the pilot project*. Strasbourg: Council of Europe. (<http://culture2.coe.int/portfolio>)

Schneider, G. & Lenz, P. (2001) *European Language Portfolio: guide for developers*. Strasbourg: Council of Europe. (<http://culture2.coe.int/portfolio>)

Ushioda, E. and Ridley, J. (2002) *Working with the European Language Portfolio in Irish Post-Primary Schools: Report on an Evaluation Project*, CLCS Occasional Paper No 61. Dublin: Trinity College, Centre for Language and Communication Studies. (http://www.tcd.ie/CLCS/portfolio/ELP_network/OccPaper61.pdf)

吉島茂、大橋理枝（訳・編）（2004）『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版社 （<http://www.dokkyo.net/~daf-kurs/library.html>）

参考ウェブサイト

欧州評議会 ELP ウェブサイト

<http://culture2.coe.int/portfolio/>（2004 年 12 月現在）

ダブリン大学トリニティカレッジ言語コミュニケーション学科 ELP ウェブサイト

Centre for Language and Communication Studies, Trinity College, University of Dublin
<http://www.tcd.ie/CLCS/portfolio/index.html>（2004 年 12 月現在）

1.4 資料1 自己評価チェックリスト例

自己評価チェックリスト

レベル A1

言語: _____

あなたができると思うことを記録するために、このチェックリストを使って下さい (1 の欄)。他の人 (例: 先生) にも、あなたが何ができるかを評価してもらって下さい (2 の欄)。3 の欄は、あなたがまだ出来ないけれど重要だと思う項目に印を付けて下さい (3 の欄 = 目標)。また、先生とも相談して、リストにはないけれど、あなたができることや今のレベルで言語学習に重要なことがあれば、それを項目に入れて下さい。

以下の印を使ってください。

1 と 2 の欄

✓ 普通にできます

✓✓ 簡単にできます

3 の欄

! 私の目標です

!! 私にとって一番重要です

私の
評価先生・他人の
評価私の
目標

印を付けた項目が全体の 80% 以上になったら、レベル A1 に達したと言えるでしょう。

→👂 聞くこと	1	2	3
少しずつ意味が分かるように、間を置いて、とてもゆっくり、はっきりとした発音で話してもらえば、理解できます。			
歩いていくまたは公共の乗り物で、どこからどこまで行く、といった簡単な指示が理解できます。			
はっきりとした発音で、ゆっくり話しかけられれば、質問・指示が理解でき、短く簡単な指示に従うことができます。			
数、値段、時間が理解できます。			
👂→ 読むこと			
新聞の記事に出てくる人についての情報 (住んでいる所、年齢など) が理解できます。			
公共行事の日程表やポスターから、コンサートや映画の情報を見つけ、その場所や時間が確認できます。			
自分自身の情報 (名前、名字、生年月日、国籍) を記入するために、質問事項 (入国許可書、ホテル宿帳) が十分理解できます。			
日常よく見かける標識・掲示板に書かれている言葉、表現が理解できます (例: 「駅」、「駐車場」、「駐車禁止」、「禁煙」、「左側通行」)。			
「印刷」、「保存」、「コピー」など、基本的なコンピュータ用語が理解できます。			
短く、簡単に書かれている指示に従うことができます (例: どこからどこまでどうやって行く)。			
絵はがき (例: 旅先からの挨拶) に書かれている短く、簡単なメッセージが理解できます。			
日常生活で、友だちや同僚が書く簡単なメッセージ (例: 「4 時に戻ります」) が理解できます。			

以下の印を使ってください。

1 と 2 の欄

✓ 普通にできます

✓✓ 簡単にできます

3 の欄

! 私の目標です

!! 私にとって一番重要です

印を付けた項目が全体の 80% 以上になったら、レベル A1 に達したと言えるでしょう。

	私の評価	先生・他人の評価	私の目標
 話すこと やり取り	1	2	3
誰かを紹介すること、簡単な挨拶、いとまごいの表現を使うことができます。			
現在必要なことや馴染みのある話題であれば、話を始めたり、話に応えたり、簡単な質問をしたり、質問に答えたりすることができます。			
自分の言いたいことを話し相手にゆっくり繰り返してもらったり、言い換えてもらったりして、助けを出してもらえば、何とか意味を通じさせることができます。			
指差したり、ジェスチャーを使ったりして、簡単な買い物ができます。			
数字、数量、価格、時間を何とか使うことができます。			
物のやり取りができます。例えば、物を貸したり、借りたりすることができます。物をあげたり、もらったりすることができます。			
どこに住んでいるか、誰を知っているか、何を持っているかなどの質問をすることができます。また、ゆっくり、はっきりと話しかけられれば、同様の質問に答えることができます。			
「来週」、「先週の金曜日」、「11 月に」、「3 時」といった時の表現を使うことができます。			
 話すこと 表現			
個人情報（住所、電話番号、国籍、年齢、家族、趣味）を伝えることができます。			
自分の住んでいる所がどんな所か説明できます。			
方略（ストラテジー）			
分からないとき、分からないと伝えることができます。			
相手にもう一度繰り返してほしいとき、頼むことができます。			
相手にもっとゆっくり話してほしいとき、頼むことができます。			
 書くこと			
必要な書類に自分自身の情報（職業、年齢、住所、趣味）を記入することができます。			
グリーティングカード（例：誕生日カード）を書くことができます。			
はがきに簡単なメッセージを書くことができます（例：旅先からの挨拶）。			
どこにいるか、どこで会うかなどのメッセージを書くことができます。			
自分自身について（例：どこに住んでいるか、何をしているか）、簡単な表現を使い、文を書くことができます。			

注 このチェックリストは、欧州評議会 ELP ウェブサイトからダウンロードできるスイスで開発されたもの (<http://culture2.coe.int/portfolio//documents/appendix2.pdf>) を筆者が日本語に翻訳したものである。

These descriptors were developed for the Common European Framework and the Portfolio in the Swiss National Science Foundation project: Schneider, Günther & North, Brian (2000) *Fremdsprachen können-was heisst das?* Chur/Zürich, Rüegger